源氏物語思附

四

113
976
4

源語恐草卷之四

目錄

柏木　樓爲
鈴虫　夕霧
御法　幻
白宮　紅梅
竹川　橋姫
椎本　總角

かしは木

古語に智婦ハ夫を立て年をこへぬ家をおこすとかや
とも見ゆ一筋の竹のぬれ世にあるかひもなし殊に源氏
ものかたりぬ夫ハ紬かしらし又女三の宮の浮たる
にも家のくもりハ源の内にくらきもうれへなるべし。とかく
心ハ此の修し女こころそよろしかるべき誰もさやうの折ふしぬ
身のほどをかへりみて慎むべきことなりと思ひ川ふけて始
文のかくし事ハおのづからもしれて親達ミなおもひまよふ女
心そへて女三の宮へ参り給ふ今ハ限りのたゞりを他
所と同世のからぬも理の哀れなど思ひしるも侍ると書く

13
976
4

柏木右衛門督

今はとてそらもとめ給ひしもとばれたるこゝぬ君人の形やゝ
小侍従女三の宮に侍ぜさせ給て今はうゑりの女にて侍るべ
き人〳〵せさせ給へとそ侍るあひすめられの女三の宮
こゝろをして御やとりのまゝうれたるのに君ひとりぐ細くこゝを
とゝめさせ給を小侍従はねをしてゆゝしくもれぬさまの
思ひ出られと恨ひて又めゝ〳〵
行幸のさ宮の御とゝぬとも君ふあるうい立ちつる道に
小侍従小侍従のうさ酒どもをすゝめ今まよ人をはやし
きやうに〳〵かくうゑりに成ぬるまで参りなりの若かゝるど

女三の御方をもやはらかにもてなしてゆゝ人〳〵ぬ
女三の宮は御方のうへ紀あるて恨を給へど源
ゆゝ〳〵ぬ君のうへ人〳〵ぬ君ふ源ふ人〳〵ぬ
給へるまゝにて紀ちまうゝべの
かゝ〳〵御方の内みさとふこゝうゝ人〳〵ぬ
御法師(みのり)させ給へ一条院にて日さ出るほどゝみ
若君はまゝ人〳〵ぬ君ふ源ふ女三の宮(薫)
ゝゝぬ物ふまゝ〳〵ぬ君ふ源ふ女三の宮
人〳〵ぬ〳〵ぬ君ふ源ふ人〳〵ぬ
人〳〵ぬ〳〵ぬ君ふ源ふ人〳〵ぬ

ものの色よりもいとゝ誰もいとゝやゝめでたがれど源ち
うきゝとも枝ひかりゝ如三の内侍妖の内さ侍ゝ
思て恨みがちにおりけるが侍の後も内ちよろ
ゝ人よりゝ後ゝ思ふとも殿さゝめさゝ孫が内命をいやゝし
付ふうにかこゝけいうにそして尼ふあるむとおがゝて源ゝ
さ内侍ゝ之ゝ内ゝ尼ふ殿ゝ中ゝこゝて行ゝよゝて思ゝ
ゝ内ゝ之ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ若さ内ゝ多ゝ内ゝ殿さ
ゝ内ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ
内ゝ父山の帝に内ゝ殿ゝ面ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ
ちゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ

ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ
ちゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ
内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ
ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ
内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ
ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ
内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ
ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ
内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ
ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ
内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ内ゝ殿ゝ

かゝる事になりぬる人なれバ心やすくと思ひ女三の宮ハそろく
源氏もよろしう給ふ姫宮の柏木ハかゝる内のかどゝもを笑ひけれど
かきくもれ心ちして日ごろにまかり給ふ帝も驚き給ひ
権大納言になさせ給ふ内裏ハ御のいとゞ心よはけてたを
親達ハおしきかなしと歎き給ふ夕霧任官ノ始めに集りなへ
年なりてかくけふ明日(あす)を限りに成給ふまでこの世に思ひ
置きすを給へバ家ごし六条院にて御賀の試楽(しがく)の時
源氏なと見給ふ御詠ばなるハ御の姫宮にやと心をかけ給ふ
なれ給ふについても何かばよれやうに思ひ文を一条に
住給ふ小の宮おちば葉の宮を念ひよろしう給ふなど

なのとなりて今ハ限りにおもひなせ給へとて夕霧を
めし給ふ御事ども給ひ給はく云ふなどやむくすの
御とねバかひなくてさう給ふ姫宮やむごとなきのゝ御後をさぞ
こぬ人ないで病す所何のかひなきやむくなくすりと此ふ
古宮の心給はおもやまかりぬれハ内裏にさへめんかゝ給し
女三の宮ハ限りしてや世ふなかれとも捨がさてまれどかくて
此の宮のたさがたにあらまほしてお汝ふに此の君の五十日の
餅
いはひ家もちる事を源氏かくり給ひて何かとさし
どももし給ふくなき自に若君ぞ女三の宮御側(そば)へまします
なりて源

絶(たえ)ず世のうの絶(たえ)をまちとくこそでいで君ねの松にたちそへ
とのたまへば女三宮せんめさ[illegible]ひまてうしの[illegible]
五十日(いかのか)めどうしのかたちひかりうつくしうかうしの木の遺言
紅梅の御方は[illegible]の高を西にはひかゝ一条の高く
かゝりて[illegible]御所三宮やはり東對面にて御ちゝ柴の高のあげさ
かりのすゞしきもかうかゝ夕雲も柏木の[illegible]柴のけうをたのも
[illegible]ものうかゝ柏木の[illegible]ものを時を
[illegible]をはりて夕さりの大將
時しらぬかをしぬ[illegible]ぬ[illegible]白ひかりのうえ拾(れん)ひ常の様を
とゝ[illegible]

ぬまの柳の茅(ち)ぬまのくゝちる花の行方をとゝねば
夕雲の足よりすぐに柏木の父大臣の[illegible]をとゝ[illegible]
[illegible]髭(ひげ)もたゞ[illegible]
[illegible]
源ふ人[illegible]ひて枝(ちだ)仕の大臣
[illegible]しぐ[illegible]
とかゝ[illegible]

よこ笛

柏木權大納言のうせ給ひ[illegible]をこひ[illegible]

源もわかぬ山の時より百分を忘れぬ事出て。
一周忌のもさぶらひ。月毎の月日。
ちごの百度香奠の事あ。我法大師の
御こゝろ。ひとえに山の帝は。女三の宮に殺害
はの給ひて。仏寺の
御ことに殺害の御弟。左衛門督は草蔭
御文添て送せ給へとて。朱雀院
世をはなれ入給ふ。
御かへ女三の宮
うき世をふかぬ。ねさめ。
若君這てゆく。
やうに思て。源
うき世をふかぬ。ねさめ。
夕雲の。梢末の小の方。一条の御息所
秋の夕のもよりの。
市の。
市物語。
市の小弾。
市の。

ろ〜ろまに心ひかれて、秋の夜ながら待ちあかすに、夕雲雀のあがるころ、やうやう笛とる出でゝ、格子開けねば、ながめくらすに、かゝる所に、遠き所の中に、格子叩く音、待ちとがめて、あけさせたまへば、ものしきふるまひにて、

寄しげき葉の名の古へ、秋ふかくなりぬ出の二ふぐ

清こゝろ、

横笛のもとゝ、ふるうぬと、ものしくなりしこゝろ、

家門宿三五人、ながめあへば、格子叩かせて、こゝろ、

一条の家、夕さり再び、行きて、

下ふけてのちたゞしとふの方、雅房、暗きに、ながめ

夕ぐれ、ものぬ、ものもあり、夕雲の格子、ものゝ、ながめ月、

心やすく、ものゝ、ものゝ、出でゝ、あふぎ、ものゝ、

ものもものゝ、夕雲の、ひかり、笛、一条の家、

思ひやりて、ものゝ、けるふ、格子、夕雲、待ふ

あけて、笛、

笛行、

ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、

ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、

ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、

ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、

ぞとさすなれば月あでやかにて末のかけたる格子
明けなどしゆへ物のけが入そこかく伺ひにやと覗くなれば
端に数多の子供親に成なれば思ひやり姉つきさすなるを
さふの男なりまろがたゆみしじ明けぬれば左なくてそのかく
けりは入こうどとれ共なれば御所が名をいへば取りのけふそなる
女房は右衛門督御身に来のよ長さゞぶに侍るへよとあり
しかじかの成るけにやとおぼつかなく六条院へ参りなれば
御妹桐壺の女御の御方ちかごかま過むつきあそびなる
女三の宮は古服の御母もさぶり出なるを女房つくづくと
見なんば柏木に御くるや引連ば人思ふれどもなの内に椎ぎる
ゆきもあまたがいとゞ恥しやしと見なれて柏木の親達子だ
猫しかる御しかが取り見すせんこの事と明くれなげきなる
あまたと見んせなまじいにやと思ふもいとゞさるみにぞ侍るべき
我邪推ゆへかく見るなるべしと思ひ返して源に一条宮にて
落葉の宮は第二の事なれど後見なして笛の事を
御なひ出て夢に見えし海路の猫へば源は左様笛を
かほるに伝へよといふ事と左様させたまへどさるといふ
猫はものが云ふ猫のして出入る
猫むし

蓮の花のさかりに女三の宮は御持佛堂の供養
せさせ給ふ源氏の御心ざしにて法まく厳めしげなり
給へり入道女三は宮の朝夕読誦し給ふ御経をば源氏
自らかゝせ給へり導師参りて何となく尊く御法を
説給へりかくて尼となり給ひし後は心のどかに世をやすく
あやまちも罪ある事なく出離して涼しく心をなげく後生
給ふ秋の比わかきどもなくまへを野べに継がせ給ひて鈴虫
虫を放たせ給へば啼きごゑどもいと面白し十五夜の
月も源氏にて御遊びし松虫鈴虫の声のよしあしを
定め給ふ松虫は人の聞かぬ所にてはなほ声のかぎり鳴き
乱るまでと人おぼしき所にてかさも何れの心の隔てある虫也
鈴むしは何心もなく打つけにてもこゑをはずにかまへて
めでたき虫なりとの給へば入道女三は宮
大かたの秋をばうしと知りにしをふりすてがたき鈴虫のこゑ
御かへし　六条院
心もて草のやどりをいとへどもなほ鈴虫の声ぞふりせぬ
と給ひて琴をひき給ふに御子の兵部卿の宮夕霧の大将
その外殿上人などまゐり給へば源氏も給ひて御琴
どもとりぐにかきならし鈴虫の宴にてあけんと
の給ひて御からげ二の宮より冷泉院より

序文あり序製

雲井にうつさとかけさそふ道しるべ栖みも物わすれせぬ秋のよれ月

序之し六条院

月新の月しるふ心ふかく我やどのらは秋ぞ物まる

ゆく舟のうさをもかつもてしけ行とそ序のそび止めて

兵部卿の宮、宮ざ見、雲の人〻おつまそ涼冷泉へ

参り給へば院い待うけ收りせ給ひて、西寄廊のも和国のも

さ海〻に移せるうく彩んはうけるあけがくふ人〻

御り移ふ源も秋始む中ふ序舟面はうて西彩海うも

ものうひてものうへり

實　文こそ

ぶつ彩る人とくふいとれ文さうは大彩。物末のいの方

一条の院葉の高殿ふうけて、人めよ物末の遺言を

さ〻ぐ〻と海ふ御みて、ひは心ふかくてもやむまト宮。

月日ふそつく思ひまし移へば、心法ふ宮ふ歳樂の

高殿序そ序息系、物ふけふ法ひ移へば、法歳の樂

小殿とふ系ふ家を物ふひそれば、それ人物りて山ふ彩り

たる律師を請ぶ下し、彩せ彩ひてあ也序車より始め。

序法の士ともまで、文雪さ人文、宮さうも西彩ひふ

小野へわたりぬ。八月中の十日作りあまたに。山
おくそしろし。松が崎の小山のもとにさうぞくあるべし。
秋のかぜさびしくて。おほ系おとこどもの。
あそびもせもあるうてみやびかへりてみやびかへりあへり。
よろしきさ小柴垣をかけてふかうもあり。西おもて
ちかき所よりの高くをかしきまうこうやしき系にておもしろし。
修法の壇ぬ塗せ彩ふとせさ分ふ。せどさ所ふて客の
居ふつさ所ふ。ふけ是が。袈裟のおりまはし。僧
まへふたりをへ入なりて。行のとは役行ちごふ。
あに彩の陰まで雲ゐ。ちらめて。ぬつん方を見えねば。
ひとりごとのやうにみんとてみたまふ。

山里のあはれをそふるみぞれふる立ちむ。そらもあさかりて
夕雪の大将とへ式部よりの呉竹より西の方の落葉の
山蔭の籬をとりあつめて立雪をかかるくるくるめて
夕雪かとあつめて市の簾内内ふかさりへ見ひわらの所ふ
内をゆかえ見しあへど。簾裏の高の見ちびの小海まで見て。
小の方れ陰子をはて陰むとちのあをふくはやびて引とどめ
まうあへと。四方かとくあつれあひて。小神の袴ぐろ結はりぬく
見つべ。袋ふふどえ裏。理りとをこ。帳あぬりあつべ。和しうて
ひとりこ。ひとえりてあ。ちびをすぐ。ぬくはて

出家入道息系の公ちかしゝ〜ようろう〜ぬかりを律師はなそ。
大日如来宗とゝ出あらば。何葉の公を出さんふ仏ので強
形ゝんふどや修ふ法いてふ式文雪持大師のいのよりかく
意法ふ出あつふやと思ひあつば出息系故高門智の遺言
にて我れをたがへどとて公ふ入法ひあまるふ。ゝ新
系ゝをかうあつばゝと示あくさるとかうあつば律師
何事と陰ゝあつばかうの出法ひあてん結らば。けさ見へ
系の結るふ。ねち柴の系の形ゝまゝ西の法まゝより。
ゝとう新ゝ紀男の出あゝる我。雪深ゝて何ばゝい法さも
又分結ゝざるゝと考子の法師ばゝゝ。文雪の大師と

出ゝ中て結うつゝ義葉の系持出ゝあゝ紀ゝのとゝ系ゝ
ゝもあく法のあふ出息系ちうゝ実数出ゝと系。公易ゝて
新ゝけあるばゝ。ゝすふあてるあゝば新ゝ新ゝみも
何ゝどゝ寄るゝ律師立ぬる新ふ将の君とゝふ世房を保。
ちゝあゝ。ゝ法ゝとゝと寄ねゝば有ゝゝどもかくる新ゝけ
あゝぬ内紀の事ゝ人ゝゝゝゝじ法師ばゝゝまで大師数ゝ海り
結ゝとゝ人ゝて云ちゝゝふ法ば。ゝ雪ゝ出ゝを法ゝ人ゝ出ゝ
あゝば迷ゝゝゝば名ゝ何ゝゝば中ゝ出公ば法ゝゝ
ゝて経ゝ海めゝ思ひつばけあひゝて法ゝひゝ文雪の海のあふ
めゝ。公結ゝゝあゝばゝゝゝかひゝふけ見ば法ばふばゝつゝゝゝと

思ひ根ざしてしるべき方もなく思ひ乱れて侍りつ
なけれどいやしき家よりなん雪ふみ分けこゝまで
女郎花をゝる野べ侍りつゝ
なんなる紀のつらゆきの書きのこしたる跡の
やうにてつゝをよ海まねび好みよせて見なれぬ
ゝとりなへて何ゝにもたのみ侍りつゝ
なのやうにをゝねびまゝれどゝに俺なへどふの方
なりでもまゝ思ひ息家の孫し紀の公ぞ好べ夕雪の
方より海りなへつゝふやうるゝ紀を彩く見よりは
こゝ人しゝ人ものぬいとうとてつゝ紀の公の孫ありすこし

人が海しをゝ人をゝ男二人見るゝ人ゝ。まゝて口ゝ女を獨り
住みてゝしゝ孫ゝ人ゝこゝ紀法ゝ指ゝふ飲けゝをゝ人
ゝ紀ゝ人思ふぞゝ思ふぞゝ。それ以ゝ海ゝ好ゝてゝ人ゝ
ゝ人ゝ。今ゝ女雪ふゝ人ゝ道ゝ人ゝ。ゝ人ゝにあゝ
彩ゝ紀ゝ人ゝ。ゝ公ぞゝ海くゝて人ゝ。ゝ人ゝ。ゝ人ゝ
同ゝ立ゝ名ゝ。ゝ男ゝ人ゝ。ゝ人ゝ一ゝ人ゝ後ゝ人ゝ彩ゝ
ゝ紀ゝ人ゝ。ゝ人ゝ。ゝ人ゝ。ゝ人ゝ。ゝ人ゝ。ゝ人ゝ
ふゝ人ゝ。ゝ海ゝふゝ。ゝ人ゝ。ゝ人ゝ。ゝ人ゝ。ゝ人ゝ
ゝ人ゝ。ゝ海ゝ。ゝ人ゝ。ゝ人ゝ。ゝ人ゝ。ゝ人ゝ
ゝ人ゝ。ゝ人ゝ。ゝ人ゝ。ゝ人ゝ。ゝ人ゝ。ゝ人ゝ

記えなふ。律師騒(さは)ぎて。形(ぐわ)子と云なへどかひなし。落葉の宮へ
後(おく)迄しと添ゆて。頭きなへど。く理(こと)りなれば。さりとてとまるまじきに
なる。六条院よりも。山の帝よりも。御とふらひなど志げし。
御息所の甥(をい)の大和守某(なにがし)のみぞ万(よろづ)事を賄(まかな)ひ御あつかひなど残りなく
なる夕霧も切りなかりて。ちはやの方へ。落葉の宮やま。
此人々へ来。御息所の御心ち重(おも)り。かく嫉なりと思はせ(おぼ)ず。恨し
うて。返辞もきこえざれば。只今は物も見えぬ子ばおきて人々と
同じ様にて。おそろし。御嘆なげく人々に。夕霧の御息所の遺言に
此宮をば御後見(うしろみ)残形き宜なりと云ひなして。家思ふ
頃になりしなまんと見えし。九月十日余り。夕霧小野へ行くの

なふ。山風に堪(たへ)ぬ木々の梢(こずゑ)。峯(みね)の葛(くず)葉も何となくしく争(あらそ)ひ
ちりて。鹿はただ籬(まがき)のもとにたたずみ。山田の引板(ひた)にも驚(おどろ)かず。
色濃(こ)き稲の中に交りてうちなくもうれへ顔(がほ)也。例の少将
の君召出て。落葉の御様体ども問はせがの御息所よりの形見
なども取り出て。其時のやうすなどくはしく。夕霧の心の方は。
年月かかる心つかひありしに。かくあへなくこがれなりすべき
形見をと歌きこえつ。とてもすまで小野へ返使つかはし。給へど
御返しもなし。是けしこそ物もおぼえならざりめ。今は歌(けしき)を
やりしうはなく形ん。花や蝶になど。かきやるなみにてもなし。お記
人の見る残同じ血に。語も女は嫉しかるべきなり残あまりの

雜面、そのくるしみを分かちあはんとつぶやきながら、涙をながしてゆくのみにて、
今さらの世道ふかとなげくてめやすく見えてふかくうちかこつ
ばかりなるさまを引歩るに、見ほどの分別のあきみの所
まで見ぶ、者まで髪ふかてうちめ、ちもいくもに入べきなり
にもあらずとこのげみて、歌さかふ、夕雪の出息不の市忘のて
ぬまで、先ちとの一条のうへにてきんと、一条を掃除など
せう時に用ゐをもちふ、蕨葉の市ぐ、行うて、小壁ふ注
ちそんと思せど市ふみを仕せば、清車よせてゆくゆくめ
きれば、清くゆくせかつ出息不の、ふ別ぬ出経の箱を、
市車に入れば、清ふあ、我四経じて蕨葉

京ちきの暫めぐりてきかつみて後ちくうちもうの第四
一条ふ行ちくつきかれど、信ふまて、古郷ともわがせきぬ
市息不とうちとりふ、ちりせ、ほどを見ぬ出ちもかなし、
納戸を市産不ふ掃つて引蕨うれうれ、夕雪の小はかちも、
一条へ蕨葉を掃ちうをみるひて、今もかぶりにちて
あしめ、実ふる人の云ひ、蕨とおさ掃ときけば、今ちうの
ふうふうと成ちんと、昭ちうつきちの所うあ、夕雪ち、
蕨葉のおりまん納戸ふ推てへ、世のうえ昭はち測ふ方を
投るかあ、ひの、掃のちきふを測ふあずくて、掃くうち
方を見つ、ちとれと昭くちんどかひあ、ふのうかふ見ひはまり

雪井、鳥也

[illegible]大臣の四方へ海を[illegible]ひ、[illegible]のやうにをもひて
[illegible]ねば、[illegible]雪降るまで、大臣も[illegible]くのごめたる不[illegible]紀公
[illegible]ん、[illegible]と思ひて、[illegible]雪い大臣へ[illegible]て、
[illegible]のかへど[illegible]ば、[illegible]公逐の母君をこひ[illegible]
[illegible]よろ[illegible]紀[illegible]だ[illegible]る人[illegible]る筋を面白かる
[illegible]と物[illegible]ち[illegible]地し給へり、父の大臣も義紫の公を
[illegible]やうに、[illegible]の内[illegible]ひて、[illegible]ん
[illegible]て、[illegible]の大臣

ちぐの[illegible]や[illegible]を[illegible]と思ひ[illegible]
義紫[illegible]の[illegible]紀[illegible]て、[illegible]と俺[illegible]思ひ[illegible]

[illegible]紫の[illegible]

[illegible]世[illegible]ぬ[illegible]を[illegible]と思ひ[illegible]
[illegible]義紫の[illegible]
伯父
[illegible]ぐ[illegible]男也、惟光[illegible]娘の義内侍、年比[illegible]雪の妻[illegible]を、
[illegible]の方[illegible]ば思ふ[illegible]紫出[illegible]給へ、[illegible]
思[illegible]、[illegible]紀[illegible]と義内侍

[illegible]ぬ[illegible]ま[illegible]世の[illegible]人の[illegible]神[illegible]

[illegible]の方

人[illegible]を[illegible]と[illegible]

第十四

紫のうへ、ものはかなくなりまさりたまひ、病重くなりたまひぬ。年ごろ願たてたまへる事どもの、なほ残りおほかるを、御願ども立てさせたまふ。法華経を書かせたまふ。二条院にて供養ぜさせたまふ。御願ども立てさせたまふ。仏の御前にて、誦経の僧あまたさしたまふ。僧たちの、布施ども、いとかずかずにかつがれたまへり。

あかつきに、別れをしたまふ。

なほ、ものの心細くのみ思ほしたり。

春の光にも、限りとて、霞みこめたる。

春の光にもかぎりとて霞みこめたる

花ちる里にまどふ心地のみ、

花ちる里にまどふ心地のみ

結ぶ手にすくはれぬ水の、

結ぶ手にすくはれぬ水の

あはれ、いとかなしかりしことどもなり。

明石中宮

御願の女房、今は中宮になりたまひ、御産の後、二条院へ出でたまふ。紫のうへの御心ばへ、人の見たてまつるにも、

とてけのつぐさにもあらねば。あでなくての世の考あさを
ものとぞうるものなれば。紀あり道ふ紀げそ紀ひさ海の考る
かれば。中宮を中法の人。高貴の中に姫君と三の高を云合て。
育めんば。式ひ二人を。又さして死ぬんの人とで出てう。三の
宮をひまへふ京でまりて。たとうるは姫なれば。式陰ふ形とし
まして。基のまへある梅を樣を。花の形にに紅をあてて。
よやしまへ。さうぐきれに。佛ふをまりあへとのふ。式三の
高を自ふ兵部卿とへふ。ひくけるひ世へ。白ふ人式二条陰ふ狂
法ひ也。親ふ敬て。世の中深く姫なまへ。ひとうちをひさうち
ようしさやうにまで。行をとすまで礼をあふ。中宮内へ参り

給へて。ひ帰ぐひふ紫の上の御方へ渡りまへば。殿のかやせ
ひうそまへて。ひけてもひてふうりく。家載見あへとて。拾遺ふ
書在のみを。源ひ殿へじて。式ひまへみてへ。こちらをまで。紀
みや。都て在のみを。婚げふ姫ふ。ひけうきを見給ふを
あり目ふまで。紫のうへ

高とみるほどぞのり形さうり久まで風ふ紅ら蘇の上語
ゆ行ふへば源

やくもせばさうをを第へつ世ふ形れそでつ強へとも
とゆをこのり。ふ。ひさ庵などをゆるるひあるにも。かくて
千年を見ん力ぐをひと思へど。けりぬる中好まで。すぐさせ

なし。今の御ゆるしなく、みづからの生き霊とおぼしつ侍ると、御几帳
引寄せて、かしこまりたる女の、はじめより物のけげしく見えたるが
中宮の御手をとらへて、おのれは人に消えし露の跡しりて限りに
見えしなるは、修法の御使、立騒ぎ、物のけの見たるを穿ひなん。
海(?)くみゆる手を上げさせたまへど、かひなくて、明けゆくほどに、きこえ
なくなり給ひぬ。鳥部のまへにて、空くひなげくことも、おぼされず。
後もくれまどひたまへり。源の中く御郷(?)ぐそて、
夕霧にのみひあはせ、僧正入て御ぐしおろさせ給ふ。夕霧
むかし脇分の春に見え給ひし御面影わすれがたくて、涙おさ
がたにても今一度見えんと思して、女房の涙の(?)こゝろも(?)

影にきえてさし、几帳の帷子を引あげて見たまへば、明りまれ
うつくしう見上げにたく、とかく紛らはし給ひし。現にみ給ふ御さま
よりまさ、空くひなくこそなへり。葬送の御続の女房達
まどひて、車よりまろび落ぬべきさまにぞそへつかひける。源も脇く
御出させなく、青葵の上がくれさせたまひしおりの暁をおぼし
出るに、その時も物事思えみるにや、月の顔の明しくの数の
しに、ちらよひのくれまどひたまへり。八月十四日に失せたまひて、
葬送は十五日の暁也けり。源今は御忌にかゝるほどにもなけ
れば、世ははかなきみにさへもいとおぼしく(?)にも思ひ
侍りて、御念誦してはかなく後のことまで思へせ給ふ(?)の

なほ我をさんとおぼしてゐ念じ給ふなる御ようはまるかなり
かの方角をはつかにかたらひてかの神をみなく出給ふべき源を
よろづ仏神の御ちかひ方々に誓願さへ日月
ぬぐしかねて理のそのかをはるかに源氏の方はるばるとおぼしたぐ
ふるふ出家をうちをはかなくてくらすべきあひだにかの
し給ふをも絶ぬ中なりかきあつめ世のほどを思ひたりやうに
仏のすゝめをつゝる方をとゝろかしてかくおもひ
あまりなれ出でしさ我こそはうるはしくおもひ
にてよ仏の道をはなれやらで式公のかのあるかとと
仏を念じ給へ我仕の大臣殿の上のかくまでありしも世に

知まで貴賤男女ともてはやしてぬまつみ神をうやまふ
古への秋さへ今はかなしてぬまつみ神をうやまふ
侍りしかし六条院
嘉名をうしなひ給ふもはかなくあはれなる秋の世をつゝまれ
中宮なども内出でうるはしかりしかの方あくまでおぼえ給へ
まゐり
源氏紫のうへの内のうまれ給ひ年ごろ書の定をはかなく
つけてもくるまにあるやうにのこりおほとうるはしく
さの侍りくをあはれぬ侍りのくるに例年のやうに

集の文ども、皆うち恨ましきとて、御對面もなし。御手の
兵部卿の宮かくぞのたまへる　源
かの霜の葉りてもやは人をかし待るのたづねきつらん
返し　兵部卿の宮
香残とあてまつるかひなくあはれの世のさよりといひや　おはしべき
御程ひもなく縁に重なりあるまじきかりて清しうらみぐくにも
かくてかくれば、さしすぐ清重忍ぶなき手につけてと衆の上に
松もし海しける世に好色かくして、清まくれ人に知らせつくて
衆の上に猶を思ふも世を重りし中にも女三の宮がわき
かくれ侍ど、名利かゝの古とふ色めの出しなさばまかなど、
事にすまて何が思さ利のわざやと思ひ給へましけし給の、
あの道なし中にも女三の宮君のこめの夜雪降し暁、女三の
宮より御の玄練をひて、衆男も忍え入やうに其へ宮に
なし給ひてしかましに、涙ぬらし給ひし袖を引隠し、何も
なき院にありしらひなりしよりよに秘ども残縁夜思ひ出るに、
後にてもまたかの方しむ世の文をも見るべきと思ひつづけ
宮に、暁に於きて部屋へ行女ざくれ、縁しう積りける雪
の方とのに其をとまつけ給へる。唯名利の色絶するに、皆かの女
ものみしなさいはらぬすく思し　源
うき世にはゆき消なんと思ひつつ思ひの外に程ぞふるかな

序文の紙(まぎ)りに行ひをせさせ給ふ御ようす
つれ〳〵遠ふみを對面し給ふ事ハ人ふ白ひ
ものしぬべけれど式部丞ふ行ひはけ方れば引ごろ過てまの
世の人ふ見たに御法せ給れんもうとましう思ひほれて
人ふも逢ざりしといとれんも因しゆ形まで引ごろ
ゆ成思ひやると目ふ見るとふ引ぬるこゝ海さるもの也と行ぶ
せだ文雪にさく出簾を隔て對面し給ふ孫の三の宮を引寄
みしふ二月ふ成ぬれば花の本ともなりふはなとわとれば白ひ
みちたるふ三の宮まろぶ樣を見ふ引ひさしくちゝぬ
やうに木の下ように九帳を立て帷子を出ろしたるぶ風も

吹ようゝどをけすみ物ふ引ふ引寄まれ給ひて行ほの
ぶうるの神ともあけんと人よりふ叫こう思ようゝとの宮
式部丞ハ古今ふ天元ふ物ものうるの神を引まさく花を
風ふ引ちゝさどとふ引ふの宮也神ともあしより木ハ色ものに
九帳を立んとの宮ふ三の宮ぶ叫ちさと也ふとは思ひ給ぶ
女三の宮へわうりふ引ふの物佛堂の四方へふ行ふ行ふ行の深き
四方ふさしにも行ゝざるゝ四方ふ行れど叫く給れ行くり引て
式部丞とふ引ふ引ようゝやまゝく四方ふ行ぶ引ふ行のせ
又ともふ引きに紫の上ハ三の宮の山吹ハ考よりとふ白ひ引さ
ものうること行ふ引ふ引ふ人ぶ女三の宮谷ふ人まもと

まどゝえみをつけてもゑ紫のうへ、やうれたるもそゑ
よく芳へあれにと、せんさう見出でゝ、古今ふ、光あ
ゝ雲ふゝまをよそ彩色ゐ咲てうくたる梅見ひもたゝと、
今をとゝて女三のうくよりゐ屋ふ咲う紅世ふ立ゐうめうぬゆ、
ゆくうれくをゆと、月浅日下ふのあ、ど源の今然敬ぬゆ、
あてゝのやうゐ彩色ゐ耳ふあうて、紫のうくまゆく
彩色をと楽てを、てゝ、それより、時石の西方へわうゐひて、
序うゐ浅見ゐ、ゆをもゆくふあゝぐるをあをと、ゝをゆを
ひでゐうて、彩ぐさめゆくて、中将の君とゐふ女房ゐ紫れと
ゆさゆをよりそゝて、ゆふゐびんゐ見られゐ序うを

ゝゆをゐゝくゆ、ひうをゐ彩くゆうんゐけふ
五月雨ふいとゝ彩ゐめゆよりゐの月ゐ、十日後うの月ゐ
ゆ出たる雲月の形ゝしれふ、夕雲ゆ形て序ゆ後うゐ
ゆふ、西一ゑゐうを近ゆ後る西法ゆ、ゆうに見石ふど見
後てゐ紫のよの色ゐ、ゑゐふ、極楽のゆんゐゆらをゐ供養
せゆゐれゆふつけてを、悲しゐのをのびゐくゆゐゐ、ゐ
方ゆゐゆ、ゆのゝんゆゑゆうねふまゐを、つる時鳥ゐ方ゆふ
なゐけゐ源

彩ゐゝくをゐのゐる月の村雨ふぬゐてやゐうる山ほゝくゐを
墨ゐゐ彩ゐ源ゝゆゆ、池の蓮ゐ盛ゐ彩を西後ゐ。

曼荼羅

涼しくなる頃に、ひぐらし（蜩）の声、ほのかやかにきこゆるの
冬のえ残びとう見んなつげにぞかひをありまける　涼
つれづれとわびしく残夏の日をかこちて御心ざしの声を
七月七日は御遊びもなく星合見る人もなし　涼
七夕の河瀬は雲井よりそこにて別れの庭につゆぞ置そふ
八月十四日は湯一めぐり行ればかの曼荼羅を供養ありて中将の
君の扇子に
君こそは浅くさえもあはれ思をとがなくばかのあそしてとはれる也
と書流しを御覧じて　涼
人ならぬ我身をまつは秋ぬまじと思ひやりの浅きのけふ

九月九日には綿おほひのある菊を御覧じて
白（しろ）菊に朝露もおき（おき）そめし袂（こぼ）にかかる秋とかな
とあそばしまへり。禁中には綿を着る遊に候。九日には菊を
おくる也。十月は大内の宴も時雨がちなるにやとなれば
あらるるをわびたる雁（かり）の翅（つばさ）もうらやましく思ひしれるにて
大宮もいかよふまぼろし夢にてもこころえぬ玉村所暮あらせよ
世をも背（そむ）きなんほど近く数にしかれたるを見すれば（つき）、御縁に
おりてくれのさうせじと思ひなる破子（わりご）どもをとりの序（ついで）に御覧じ
つけて引きを世なる彼須磨の御わかれの時紫のよりより来せ
ましとどもあはれしきなかに、暁書たるやうなる墨付など

がふ子とせのがくこにもあるべきなどいはずなるんとおもへど
かひなくて。おまへにぞ様せなふ。ちりくの中にてさへ(あさく)人の
書しなどみえ。あり追ぬふ偏してかきくへしそれども
見わかぬまで。終り料行る漆の。水茎にながれてふを。何まり
知よりしとくのみるべきを。かきいりてなれば。よくこそ見たま
へいりさせて。源

あでの山あえかしく人をあててぞ。跡を見るべきも猶まどふかな

又あまりにかきならひ。かきのこした

かき川めて見んも迷ふさ藻塩草伺し雲みね小細どもあま追

と書つけて。ここな様なせな。傳仮名をしらせしげりにぞこそと
おもへば。此よりもありまでに恒須ば。道寺師に行重なかりるとて源

猶思ひとるる月日をもあらしぬ学に年をもつがりのをもかふや恐ぬる

禁中がさふへ仮名とて。師匠に法事行る也。元日のるす意より
あらかべくと控てさせなひ。くりにありる知さて猶肖まく
おぼし侍りけたりとぞ。源氏のるすの是を知り此時源の行年
廿二三也。此巻を。白ふ家の壱の間八九年ほど也。此間于
うせさせなふへし。朱雀院。致仕大臣。醍醐太政大臣。是の
兵部卿。此家の上の傳文式部卿の家などにて也。

小野ふ家

源の光かくれ給ひし後世ながらびんをつぐきみのめぐりあひ人まれの
市一門の中にたゝ一人ぞもの市孫の三位の君三の君の古服ふ
ぬぎかけ源の市子かのうるしこうがちもあべて紫ねど
源ふかなかりしに唯世ふ多づひのうるうりくて世ふ立張りの
てん三の君を兵部卿の宮とぞいふさきの市家ふ紫のうへの
市遺云ふ海色二条院ふおりて海色紫のこの市なるふも市孫
今世文雪今ふ右大臣也六条院へ一条ふ不とせ一落葉の宮を
猶ふ源の内のうへ花ちる里ふ始ふ位のひ二条院の
東へ後の君ふ内右の市孫の新しき内後見て今とのごとく
六条院ふ位ふ薫の君を源氏泉院へ中宮院へ院宮ふて
思ひ出づる文振せる勢位ふ中ふ左大臣ふ中将ふなりぬせ
ふ雅なる時源の内子にてふ新しき文ふ新しき文ふ
新しきにやと我身ふ思ふやまちの思ふやうにぶべいしてて獨
言ふ言ふ
杉ぶ川ふ流ふ流ふ
市毋女三宮ふ市ふ杉ぶ川ふ流ふ内右の手をやたてふ海ふ杉ぶつる
新しきふ也ふ新しく仏道ふ入て思ふ思ふ
ふ流ふ流ふ思ふ思ふ流ふ流ふ
市ふ市ふ市ふ市ふ市ふ市ふ
新しげふ新しく姫ふ新しく足文ふ足文ふ市ふ市ふ市ふ

先きまでは引ひ、きのびあり、打てこ氏白ひかりれふけまだ、
こゞかつらはさゞ見みかふ、高新郷の高ふ氏こほりとうらやまし
ゆのみひて、こて打高氏集あ年ゆくゞ、そまく打ふゞ
四白ひ地見みよう世の人の美名ふかほる中ゆ、みなこ高新郷の
高ともて矢でこゞゆまし

紅梅

主氏桜あざら大納云とふか、拾木のさし次の者、無女ゆとひし
人地、年妻のかくまてふ、髭黒の侍娘桜花の君とひし。
源の侍年長高新郷の高氏ふの方みの侍むとあひとを

侍ふけ給ひしぶ、ぶけ侍ふ姫ゆひて、姫君を引具し、この桜花
大納云の北方ふ知ふ、大納云の北姫、北とこに二人あり。
高殿ふの君、二人出きゆ、姫君をゞ春宮の女侍ふ知
ふ、ふの方の侍ふ子の姫君を、春宮の侍年白ふみやと。
大納云ゆゞして打くけきを、高氏こふ氏姫君の
新殿の庭の紅梅、盛ふ見ゆ、枝を打てふ
高新郷の高人、大納云

ゆゞして侍の御ゆ氏園の梅ふ先咲ゆ、うぐひすや行るべき
白ふ高ふ、こも高も、ふくてなるびとめでゆひ、北こ人
花の香ふさそひ見ゆ、ぬべき者ふ、せば風の便をすぐさ海やん

物くさ人なりけり。されど、深しう世をみんとて、好色
つくおのまゝにて、大納言も心ざしを寄せ給へり

竹川

藤原の太政大臣の源の四姫君の玉菅の内侍を、ふの方に持せ
給へり。その後、男三人、女二人出来給へり。姫君達と、女房ふ
まゝせんとかづきまゐらせ給へど、入内を深望給へ
二人の姫君、うりくにてとうりけれども、あまりて冷泉院
よりも、帝よりも、女房ふまゝせよとの仰せ事也。むりに女房
玉菅、冷泉院へ参りぬべきさまにて、藤原の小はら方ふ

渡せ給へるに、式姫君を、冷泉院へ参りもとに玉菅ふ
男人、女房の大臣方に三男、義人、少将と云ふ人、式姫君をぞ、
仕まつれば、俄て、女ぞ、りうりうの式、義人のみねの母方ふ対て、
姫君とて、同士也。姫君の所ふ、俗名とて、式事
さのみやうにとせめ給へども、ゆるす中ねど、式玉菅、兄弟あれば
うとかりけれども、姫君達のみを、唯ゆゑあり、男
ゆゑ、ゆゑ、実ある君ふ、ふ出て、俄ふ、強ふの所ふ、
四月に、結婚の君方、彩やへ、義人のみねに、菅中ねにて、琴
など弾き、竹川をうちひき、琴の巻ふ、ちうしんごとく、
竹川と云ふ人、僧馬楽と云ひて、神代のうるひとの也。見ひと

川ふかく流れて、緑岩を分て、小一川、伊勢の海、かつらき様人がいひて
数くあり。今は世のうつりたひ也。葛城ゆりて、ひろふ信仰のもとく
竹川のそこ石出し一姫ふかくさきころの度のもろもろ
ゆくへ、信仰の君

赤川ふかくを姫ゆくへ

武姫君遠の初瀬の遊のまくに本さうの人て紀様ひの武君遠
をさきふくさはさくもとて武様をさんあひあふ所父母兄弟
姫君の様と所さめあふ所母玉菊妹の君は花とのあり
ゆくを思ひあて花のさうるふ武様をかけ物にして姫君ちち
碁をすかうを花人の世ねのさをたてゆくを思ひあくがるを武

川ふかく所母三家の上所父文芳、文分弛立の子紀様をいとうを
して姫ふかくうんと、玉菊人のあくに碁のおくに人ゆく。
川ふかくまくさ市ふむけ、なるーかく、弟止彩ゆくゆく入ゆくを。
玉菊と、文芳のふかとのくゆく也。紀様ふ日月ふあり君の
冷泉院へ参りふ、帝よりのあるをのあるに、お遣せかく出る
よりかくに、ふくに碁ーを一妹の君ふ所母内侍を癒りて。
文佐ふ五ーを、姫君の冷泉院所ふさーほうそ紀やふ
時ふさふく社姫む中ふ所ふそ弘徽殿姫をふゆくふ
かりて所とかちに姫ふ武姫君の出ふに、ふ君一不姫君一不
物乗ふ世ふて、年月ふふくて出ふれば、玉菊を

くるしがりて何しに冷泉院へまゐらん若人の小将らがほるを、舞にもえべかりしその代今も二人の人々官位もなくかぞえま思しけれど常くめやかにておもせんそのさと憎ひなつり

はし姫

其比世にかずまへられ給はぬ古宮おはしけり是は桐壺の帝の八の宮にて源氏の御弟也冷泉院の御時は源氏の御子なれどうへは御兄也冷泉院を春宮にたてまつらせ給ふ時源氏の御兄朱雀院の御母弘徽殿深く妬み給ひて同じ御継子なれど八の宮を春宮にたてんと思しかまへしその露顕せしかば、

源氏なき後八の宮を御世にもしれずやしなひ給ひかりけるがしかるを此頃の御威勢ある方は大臣の御娘なりありしに今むかしの方へ住居給ひけれど源氏も契りのふかくなる紀を御世の軍にて又なく人の世もかなしてすごしなふみ美しき姫君生れ給ひつ是を跡の形見にいとをしくかなしみつゝ十とせあまりて又姫君生れ給ふ産はたひらかにありけれど御方を煩ひて北の方はうせ給ひぬいふかひなく悲しき世なれど北の方に慰めてこそ今まではありつれ今は世をそむかんと思しけれど姫君達を預けまいらすべき方なければ御心にまかせてありしが今は持仏の御かざりをそなへて明暮経ひきに御念誦の勤めには姫君

遠を教ひ成人して琴びわを学へ学のうらうらなる
日新月池の水鳥どもの片ごひ離ぬをうらやましがりあひて
琵琶琴をしへ学ふ小さき花ゐ花ゐ
あつまりに面白く学ぶ遊び波をうけあひて八の字
水鳥のかりがね世ふ三ねん
なづくしやと序目を行のごとせあふ姉妹
いとでかくすぐちけるぞと思つまをうれ水のちぢりぬぞ思る
中の君
あくしをとよみ行き君あくが我ぞすきりに成べうるまける
巣守
序まゝ〜ぶんとをしげあて折りまをんぞあとれふ
思ふぞらん序父亦序母女序みをやおくれあひて内づきを
ひ後母をあけ遠ぞ才ぞ後を序ひあひ遠て世我
わるなづくひなどもんいでもせあるん言紀人とふ本ふを
言分大橋あるぶ女のやうにおりませば序母方の祖父大臣乃
序濃り打金銀珠玉琴をしまでかりれど打傷をなくらせ
よそ〜ひ玉打道具などづるぞ学ぶるを孤ふ氏住ふ家
やけふやれが字治ふ山ぞと指ひふ福ひふ川内
わるり形遠ふ細代のけひちく河音かりまして南うな歌
住移びひふ移けぞ遠ぶんぶんもあるん花紅葉水の流遠に
如をやるおよりにて形ぞあるつりかのまれ〜ぶくふるる形遠る

浄住寺のほとりに、いとたうとき人ありけり。名を阿闍梨
住けり。才ある賢人にて、世をのがれ、名をも捨てねど、われやけみも出つべく
願り給へるに、ふたの八の宮の法文を讀習ひ給へば、学問をかぬ
者ふかき事、深き理を究め給へれば、公ぞうの蓮の上の
はすの、濁れる池をはなれず、氏姫君達をこん拾んうしろ
見たてまつりて、所在なれど、隔なく語り給ふ。阿闍梨、冷泉院にも
浄住寺にも、いとうとき人なりければ、そのふたの宮の仏法ふ
かくおはしまして、いまだ世にもいとまれなりければ、俗
聖なれど、人々仏の優婆塞の名といひ、見世棚に居給ふ
ことなり。阿闍梨の物語をきくにつけて、下心ふかく思ひ入り

給へり。必ずしも、ものの道ばかりにあらず、氏阿闍梨をうやまひ給へり。
たとへば、阿闍梨八の宮ふ、業の浄土ふ、生まれ給ふべき
道をもあらはし給ふ。住吉の社ふ、ものの初めの願ことごとく
如と聞こえ給へり。ものの道ふ、学問ある法師ハ世ふ多くあれど、
住都住吉ふ、阿闍梨ハ、まことに聖才ある法師ハ世ふ多くあれど、
下の、仏の浄土ふ、子とふ、ものの道ふ、学問ふ、
学ばせ給へり。住吉ふ、氏八の宮ふ、ものの道ふ、学問ふ、
学ばせ給へり。住吉ふ、氏八の宮ふ、ものの道ふ、学問ふ、
住吉ふ、氏八の宮ふ、ものの道ふ、学問ふ、

泉ぬ然の事ふ八の宮ハ世事ふあてもちゆふ念仏を阿闍梨の
寺ゆて七日行ひゆとて八の宮の西面也有明の月ゆつく
さ出るほどふ出てもて蓬生ハ行ゆ近く行るまゆに
ゆ〻琴ゆ弾〻に行ゆ宮の琴の音と東屋
もて行んそ〻ゆて行ゆて おゆ一つさゆ出て 面白ゆ事ハ
八の宮の御ゆ人也姫君逢ゆ式ゆ一中さんとゆふ行ゆ御ゆ
ゆひとゆ御ゆ人ゆ琴ゆ弾ゆて出ゆ琴ゆ音ゆ聞ゆ
人のゆ〻に好ゆ者のゆ事ゆ聞ゆ東ゆ〻ゆ御ゆ
ゆて〻ひゆて行ゆひて 中の姫 こゆ人ゆ琴ゆ弾ゆて
こゆ世ゆ〻ん入ゆ月ゆ おゆ〻ゆ〻ゆ御ゆ簾ゆ

巻ゆ上ゆて〻ゆ〻ゆ人ゆ琴ゆ弾ゆ居ゆ琴ゆ琵琶ゆ弾ゆて
撥ゆ手ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ月ゆ傾ゆ月ゆ
さ出ゆ月ゆ扇ゆ式撥ゆ月ゆ招ゆ
市ゆ〻ゆ月ゆ影ゆ
月ゆ〻ゆ八月ゆ〻ゆ月ゆ
月ゆ琴ゆ月ゆ月ゆ
月ゆ招ゆ月ゆ
ゆ〻ゆ月ゆ月ゆ
ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
撥ゆ月ゆ月ゆ琵琶ゆ
撥ゆ月ゆ月ゆ

人やあるとうん。清簾(すみ)をかろうして、指ひとやめをかけるをうつて
ゆくてまのかたづくに、ゆうはんもはるかにかすみこめて簾の
まへふかうて、孫なるをとこ、おとこのわらはの紀(たこ)に
やうなるほどに、大君あんしらひをふ、老(おい)人紀(たこ)をもて出おるを、
それをゆびをして大君のかたへ、氏(うじ)おいの人がく念をふ物とせ
ずつを、八のこゑも、姫君遠くも、はひをふをとゆびをして、はしの
やうに、ゆるをとゆびをつかるを、昔の四位がこの物をたつにたろし
めさせんと、手ぢ孫ん、じけるふ、姫ーさ、ものあれ。
梅木権大納言と、ゆうしーくを、紅梅の巻の按察大納言の四兄也。
をめけるを、れうの母あのいこゆかるこを姫、君を無とを、ゆうを梅木

今は八の宮ひ、をーをゆうをゆんと思ひさば、をゆうて、姫君、
ゆうをゆうんと、ゆうをて、ゆひをーつ、をゆうをんがーを思ふのの
簾ををを、ゆうをはーけをを、ゆうをの、をゆうををを、
ゆうををを孫をゆうを、をゆうをををををを近をれば、
をゆうをゆうをを姫君をゆうを、ゆうをををををををををを。
をゆうをゆうをを姫君をゆうを。
梅姫の、ゆうをををををる風さん、梅(ちく)の、をゆうを神ぞぬをぬる
ゆうをゆうをーを、をゆうをを。
ゆうをゆうを字治の川(せ)をゆうを、をゆうを、をゆうを、をゆうを、
八のをゆうを河、ゆうを、ゆうををゆうをゆうを、ゆうを、ゆうを、ゆうを、
ゆうを、ゆうを、ゆうを、ゆうを、ゆうを、ゆうを、ゆうを、ゆうを、ゆうを、ゆうを、

度
あびて見みて、こゝかゝる位にて、移り行ものの
哀成、筆にとゞめうつし出すべき、筆端とゝのへてかゆるゝ弱世、
八の字の琴の琴成、ものさびしく、姫君遠成を、行くゝ、
聊て弱みゝびゝ、言葉、序ひの時に成れば、杉紙に入せる、
かゆるゝ、無成、石出て、おとひの物語のすゝを、氏無を、
姫君遠の、序毋、うゝ、かゝるを見ぬゆゑ、なを、ゆゑ
姫君の、序後見ゝて、五月、年に六十にかゝゝぬほど、行り
梅木の、菩提、ひゝ、薫の、生れ、ほどの、よく、
つて、ゆる、梅木、女三の、言と、夜かゝ、移り、無、又、書、て
見と、女三、生れて、無、移り、ぬ、ぬ、ぬ、後、て、
うちゝ無、主領の女房、成て、ゆる、十年、移り、て、男、
離、後家、敬て、都、細、今、氏八の、言、ゝ、と、移り、て、移り、
言、て、薫、ゝ、て、見、ゝ、唐の、浮線綾の、切、て、縫、
袋、上、と、ゝ、文字、と、ゝ、書、細、ゝ、て、結、て、封
付、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
紙、て、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
梅木の、手、て、病、ひ、移り、成、ぬ、今、一、度、ゝ、ゝ、ぬ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

又うはるの生まれつきの代書て

余りかくれともうまれつきまで人をもれぬるねふさ一枚の紙をひすゑ

書やうたるやうにとめて行後の君ふと上書にありちうこうふ

出のすこかはなぜかびくさいたるあげくいとのさえびおで今めさ

あんにもおとらねば蒔ちるまたまつめ山うに取りはし

りんと笑止ふるひくさ

椎こうを世や

白ふ高ゐ源氏の内孫せうはるい家の枝末の子孫どうべゐ

源の内子ふれば白ふ高ゐとおぢをんせ内ちうの出母女三と白ふの

内父帝ハ内ちうの母ふ出母うとについてふ内ちうこぐ也弟外

内中よりて何事もはうこうちうひば八の高の姫君遊のうを語り

ふかはかりのあるとうく出ふ入てうひ給

ましたく思せど高ふどん物くちく出ふ御ぐ

ゆれば初瀬ふ立給ひ一給ふ成ぐ

宇治日中やどりせう勞ちうんため思て立て二月廿日の夜日

初瀬ふ詣ふ公卿殿上人あまた出給出ふ右のこうはうも

おりまた内ちう伯父夕霧の大臣の知行の宇治のわうはうも

あはべそこにて四地光ぐもあり夕つう出琴をてはうびふ

前の苔ゐどん八の家にもよく咲くれん八の家よりまかるく
清爽あり

山ぶきの高吹くさ高の高あるを隔て見る遠の白波
ゆきかの雪川うきさはあるうれ彩見だ式ゑしゐわるせんそて
うるるかよりて白ふ家

をちこちは汀水涯い陽川をを牡吹かゆ宮居の川う野
ゆるるい八の家にまうでゆ。白ふ人かろ〳〵う彩る山多あ〳〵ねば
自由彩ゑば只一條りて前をさ花の枝ふ付移ゆて姫君へ
清爽清ゑいさふ

山稼白ふあうに君さて同じかごを彩てげふかま

清ゑ人しゆえゆて彩ゑれど。かるる彩ゑ中の仮初ゑを深の
やうにゑふ人ゆりてをうし紀物也。たゞ何ふ多く生ゑゆ。と人〳〵
ゆゑ。中の君ゆゆせてをる

かざをる花のおうに山街の姫ゆを見ぬまゑのたびゑ
白ふの山むゑ日花大納云彩どゑ多ゆゆ。ふなゆゑ。海見移ふ
八の家ふい芸のつ見ゑ。ゆををうく彩ゑゆふ姫君遠移ゆをのひ
ゆふまゑに。ゆゑ見ゑ。ゑ彩只一ゆ見だゆ。ゆ一ゆ。わにをゑえゑ。
かゑて彩ゑ一ゆ八をゑゑをふいゆ〳〵ゆ一ゆものをゑみゑゑ。
大君世ゑ中の君世ゑふ彩ゑ。八の家八今年ハ彩りくゑ一ゆ
ゆゑゆゑ年也。物ふゆゑうく只ゑて。花より清彩ひたゆゑ彩く

せうぶ殿の文こうぼるの元秋中納言の成女殿中将殿と
八の宮殿とのうちふ收ひあひ給ひ紅梅殿ども
みひて行うん計みも姫君月を経ばそうひあへ見ぬこうちろ
めうし紅どたのそのへ殿ふをもぬ(袖)ぬ(濡)せ殿をうけ(受け)ひゃあへを姫と
思して佛前より入給ふて八の宮

京行て宇治殿八の月まぬもぬ(濡)ことへ殿ふ月でとぞ行りふ

序ぬ(濡)しかる中納言

ふの行うん世ふの指せんもそよのちだり殿ぬ(濡)ろうてこの殿と
ぬ(濡)るふ姫君達のれの海ふ方へ寄りあひて無紙にて物語し
給ふ指木のもぬ(濡)うて夕霧はうへ(上)しよりむ月まうう思して

今はうつうひあふ中のうちさへ人の様はたいむ月てるりて新
年ふうへ殿ふ中で宴ふたのそしげふ月で姫君達も踊くしくる
そて新しふ殿序篠ぶ月に對面ふ出ふ世ふ殿ふかるふ
指姫の巻ふ琴琵琶とて笛ひあひけを取て月ふひ接ま
道ふもさめて行うで見を赤和ふぜんと和ふれど雪のふふ
ふぎしひるまそて海うで年りしう方が今ふ武道をうのあうさんも
人の行をくぐ殿ぬ月けまで月ふ出さでるまふ秋深く
成まうに八の宮ふ山ぶうふ行ばえ人へばちづうふる家
ぬて行うんと思して姫君達ふよろぶ川のうひとへふ紙く
しる紅ふ行うひてうる紅ふを行ぶ新よぶ行ふとろく

かきつばた花のあひ面にて河岡利平の寺へわたる文姫君逢ふ
ぞ知ぬるく侘しくて、よゝかつ記ふ、めくらひてくしの文七日彩ひ
文ひ忘仏今日ワり結願成ぬ文ふ、寄りて今新より姫を
抱みと苦ぐ見ぬ、ぎをつぶ見て、絵屋さ小神ども抱つて寄る
文ふ三三日にも成ぬ、ゆうゆくと彼を寄りぬ文ふ文のこれをに
あぶ、やうてよく彩り畑ん文ど彩よてのあひ和こん、姫君逢の
ゆうにとれば、しに彩げくに曙の文ど文ふ山より人さて氏東平はかに
ゆうれ文ゆうこやせば、物もおぼえあつず、ちゆ、悲しこあつ
こ彩ぞもゆ文ひて、あくゆ文ひくゆ文と思つて、ゆ彩ふ金沢ふ彩え
文ゆ文、白文ゆうもあひくゆ彼ゆつゆさゆ彩忘ゆて、かゆる

ゆうる文ふ姫君逢人ゆ姫くゆ彩ぬ、花の百ふやつぬておゆ人例の
無我百ふて八の文の清ぬくゆて彩ふやうにと、文のこゆ人
うとゆゆ人ゆ彩ふ人、彩ふつゆ文ゆ彩ゆ文ゆ文ゆ文

時八ばかりなるものあまたとゝ、ふたりとぶらくるめの方へとうるまゝ、
ゆるすまじきものゝ、ぬるゝとかゝるゝ、ゆるる新ものゝ、年はまつもなく
ものたり給ひしと思ひて、年は四ふまゝ、ものゝ、言くさゝ位
にて、つく物らうに見ゆるもおろかなるぬぎ、こゝろひとれ
ぬべき、家なるなど引結ぶせて、語じ入給ひしよりもおし、云
ものもつゞけて物をのみまゝ、いとあやしく公卿のゝ、
かゝる公の用ふかゝりていえもつまで、中比君とハ白さまく
なり、姉君とゞ京のゝふと思ひ人、女の四方ハ、ものもるゝ
べきふあべかりつゝ、やうにそろはゞ、ものゝ、ものも陣
なくかゝり給ひ、ものも入給ひ、ものゝ有付の事をなのゝ、

身はものゝ、ものゝ、ものゝ、親のゝ、中比君のゝ、
ゆゝ、給合せんと思ひ、それゝ、いひゝ、ものゝ、おしゝ、
白さまより、つゝのゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
君より、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、

君のゝ、山乃桟君ゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、

ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、

浮世をそむけば法師にもなれと教へつゝ見せ出でゝ帰る

こゝろよしん陰とおのゝ指ゝと宗紀郎よ彩にあるゆゑ

とて帰りぬ白木の宮治へ幸びゝ参りぬ（どれ西へ）

帰りゝ紅葉だゝ月ちにんゝ山のある庵ゝ幸と角につけて

うゝ月をぬきゝ参ゝ来りて幸ゝ月やゝにあゝびまして（とおゝ）

ちゝ母のひあゝ後見ちよゝて彩ゝ（うゝ）ぬく好ゝ月ゝくだゝ

ぜんにゝ月ゝであゝぢちぜん（と）ぬゝえゝあゝ白ゝもゝゝ月ゝ

紅ゝ月ゝ

はぜ弟まち紀

序治の娘君達のはまゝけ嵯峨ゝ川風もゝゝ

氏秋ゝ物ゝ月ゝ幸ゝて八の宮の清一国忠の清吊のいゝ紀を

せゝ弱ゝ月ゝ山の阿周利玉ゝ阿ゝ弟の子を立持てゝ幸ゝ入ゝ

清吊ゝ月ゝ成あげ（絶）孝成姫君達の物（ゝ）ゝて来ゝ

引見ゝぐゝ月ゝを九帳のすゝかげゝ月ゝひてゝ月ゝ

あげまち紀ゝ月ゝ幸ゝ月ゝを結びゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ

とゝ月ゝて見せゝて大君

ぬゝ幸ゝ月ゝ月ゝ月ゝ家の玉ゝ月ゝを見紀幸ゝ月ゝ月ゝ月ゝ

ゝ月ゝる奥ゝ月ゝて八の宮ゝ氏姫ゝ月ゝの子ゝ月ゝ月ゝ月ゝ

ゝ紀清有ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ

恨みをかけもうしけるに、中将君を盛重と思ひ申さんとの事、白宮
白宮
なんどの事、あぢきなく、あぢはひなくなれば、白宮
その後初にもおもひ入るよりは、大君の中君をとり
取よせて、後見ていとおほきの所をもうしろめたく
思ひ給へ、何事につけても、世をはかなくのみ
らひて、世間のほどふるまひがほゆく、世を強重なる
思ひ給へ、世をも式部卿宮、家
和ら、なほ世にはなれ給へばとて、おぼえ
ちらふ、あみの人をもあらぬ、わりくらの
見そんと和ら、思ひ給へ、世をもちてつくもの

よの方の御法なるに、つくづくとねどもの思ひ給へ、
なびうん、立て妹の中君をとり伝ざるべきうる合点
四月の人々の無絃始めの方の大君、ふるふる中君と思へば、何かと
の方にての合奏とあるべ、たゞ押て入給へんと、世を合せて、
式部の方を姫君の婿にとる方へ入給へる、大君人の世を合せてさぶ
ものとは思へども、男の若すべき世なるとて、伝ひて、
中将君をば、ひとりして、ひとりとなりさて、かくるの姫の姫
我は、ぶざまのあるよう、世のあひ、世を合せ、ど
思へば、なほ、うれしく、思ひ給へ、中君よりこそ
指ぐ、やがて思ひうつるもんと思ひ、ふるる姫君かと思ひ

つるふ妹の君なるべし。ものびのかたなる所にて、出ぬさきのりを
聞つけて、ものしたまへば、ふるひあつて、とうく出給ふ。おかし
まんなるべし。あまたたびひきりんもあるほどけるべし。まづ中君を
のこすまじとおもひて、ゆりあひて、又の夕、白ゑぼしをそなへ、ひとり
車にて、宇治へおもむく。白ゑぼしの人まつて、立つるかぶざう
入のひて、無紋なるさ紀の袴ばかりをぬぎ、大君
のもとへ中将なるべし。されどこそ、ものうしろめたけれ。とりあ
ぶ人無き引きまで、白ゑぼし入をまつ。大君は、美ふるもうるはず
のる對面せんとのあへば、常はやうにうち、ものさびもなきあるべし。對面
なるべし。白ゑぼしの遠まで、ものうく、はるかに思へ、こと有同車にて待る。

無ぞ、なるべしてて中君はあのせきのけん、合はれぬ。つまりて、あるう
ばかりもんまにたりあつてとのあふ日、ほまうしぶさあう、ものうして、ねるま
いるまで、あらず。ひまに、さべり。あるべしつつ、そてあるべ。
思ふ、ばかりもんのもの、ものうとてもこうはるに、ひ、ものうとて、雑色て
ばかりばかりふ
なるべし。あやうしてあるべしつつ、ものもゆるねあけぐれのあ
大君
ものごとふ、ものうしろめたし思ひやる人やもなくなるべしなるほどなど
白ゑぼしと同車にて、ものうるまで、ぬるどふ、ほどなく、大きさ、中君を
白ゑぼしあるせるべしなるべしあるべ。今のすべきやう

なけれども、花咲の方へひきあげ、清水を入れめぐらせ、
きりて、枝ぶりをよくしたる人、なほ、松の
あるうへに、白ふじ、白ぼたんなども、咲ほこりたる
なるべし。あるべきかたちにはあらねども、
蓮にはいとゞさもけりとぞ。大きさ、嫁にも
中者ふに、身の不自由ふにあるべきのおもふまゝにあるべ
べうもあらで、公よりの御使ども、ものの
嫁にはあらねど、かゝる者なりさを、人のせんもあり。我
おもひとるとおぼしきをみひそとふひなして、京へ呼なんなど、かゝる
物をつゆのみふ白ふじをあざうの大名衆にせんと機嫌を

額ひきつゞけ、物もの者あるうの物をだ、さるべきの嫁、かゝ
ひとのびあるうき嫁ごゝめんと思ひて、兎角遊ぶ
たるを、ことにして、あるべき所にて、強く者ありさ世のなかも
よろづのことふきあるべ、宮法にわるべきの物をだ、
一回ゝとなどぬるかるとなる者して、見ぬ者なるべ
結をあるふがくわるるべ、婦君嫁ゝ思ふよ、かるふの法
ぬるかるとしたるべ、わづゝけをだ、船をみをさ法ふ
をけをだ、ねごに對面ふ、白ふの踊く成をふ出ぬ者の
うれかるべ、あるべかるべ、ありさ成、幸所せんゝ、みふゆ（なり
所をのごに思せとかるべふ、さてもくおそみぬ中とふ世の

中にも男の子ばかりで、姫ごゝ[illegible]
[illegible]ばかりの[illegible]
[illegible]
[illegible]

ゆるしてふみをもてはけまゐらせ給へ。あるじ
のこゝろひとつにかけ給へ。自ものいとうつくしう
ぞ見給ふ。宇治殿のあるじにて。そこもすまひかろ〳〵しきにはあらぬ
ものをとゝ。ぞ。ものの方角つゝ。はさんの宮。御中ゆ。
清水に住せ給ふ。里住まし給ふゆゑ也。とて。内書ふり捨てゝ。
まゐらせ給へ。宇治へわたり給ふ。かりうんやう。かりうもゝ。
わざふ。糸みと。姫君の。ものおぼえ。ふうくはすこしひてゝ。
なるゝ。武ゆ。ものとて。こゝろ。がりみゆ。大君。悩ましき。
かりうも。ふおり。行のうち。ものごとも。いひ。ゆ。て。
ゐるふ。大きゝ。ものとおぼえ。ものとて。ほゝ。宇治へ。

あり。兵ゆて。清水ひ。やう。ひ。て。つよ。ものとて。ものあり。
ぞりしかど。ものに。物を。ゆ。て。ものさんで。おもて。ものあり。
入ぞりしつゝ。ものみや。今ふ。毎のむづ。ものとゝ。ものとて。
あく。ものどゝ。ものとも。苦。ものぞ。大やけ。ものもげ。ものみて。おのづ
から。ものより。ものふ。高。ものして。姫。ものゝ。ものあ。入。ものして。清水。桃園
おもし。ゆて。物。ものえ。ものど。清。ものも。ものもに。ものして。ものすゝ。ものぐ
ものも。ものゝ。ものぞ。河。園。梨。ものを。ものて。新。見。姫。ものせ。ものふ。世。ものふ。語。ものあ。ものと
ものぞ。ものり。ものを。集。ものて。繼。法。後。ものひ。ものま。ものか。ものゝ。ものは。大。ものの。清。ものゝ。例。ものよ。ものな
ものて。ものも。ものを。入。ものて。ものを。ものいと。ものせ。ものま。ものん。ものと。ものて。中。ものの。ものの。ものゝ。ものの。ものゝ。ものの。ものゝ

ゐもとにひきてどもそこにけたぐへ白ゆきあるせゑ
見こそ雨ふりなんと聞えゐたれば、ものいとはるふ
でさまにて、侍ふ所はなどなかふしやと、今は悔きこゆるされど
見放ちまゐらせてきたにあるねが、安くおもせとの給ふ、侍まぐ験
あるかぎりして行せゐたれど、ひとりのこりてはいかにせん
消えてゐひぬ中君をこそ見でと思ひ沈むゐを理に彩り
ひかるゐ人あさゐゐはんやけりさまと史殘遊くよせて
見ゐたれば、雖物ゐたるやうにてかとりゐるゐも彩りはまるう
出のひかるゐどのやうにて姉とゐ見るわざゐを式と思せど、ひゐ
ゐうて、彩くゐ姻ふゐ聞ゐるゐ思ひこゐうてゐ、ゐ

出あるゐが、大ゐうに思ふにはあるゐどうて、古くかゐ氏より
思ふゐひどゐも聞ゐえゐたのゐ白ふ高をとうくたぐうてわうを
ゐたど、姉君のゐはうち、相ゐくゐ白ふ少ゐと思せば、相めうて、
中君をゐたがゐるのかくゐ彩がくと義ゐ君ゐたゐ母君
聞ゐて、ゐぞにゐふゐゐの相ぶつゐ彩く思ゐんとゐとゐうて、
出ゐふ行ゐふ二条院へ中将君をむかひゐたてゐ給ふ

早稲田大学図書館
011888008502